

ガンの三大療法 外科・抗ガン剤・放射線の後遺症・副作用に 可視総合光線療法で効果が見られた症例

一般財団法人光線研究所
研究員 柿沼 規之
所長 医学博士 黒田 一明

ガンは細胞が突然変異を起こし異常増殖する悪性の腫瘍であり、死因別年間死亡者数第1位で、毎年30万人以上が亡くなる。

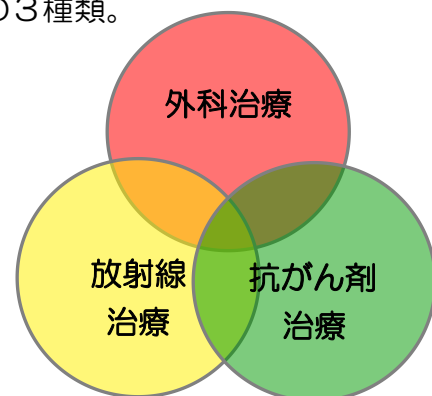
病院でガンの告知を受けた方に提示される治療方法は、以下の3種類。

- ①「外科治療」②「抗ガン剤治療」③「放射線治療」

・ガンの種類	・性別
・ステージ(病期)	・環境
・年齢	・本人の希望

これらを考慮して総合的に判断し治療方法が提案される。2つ以上の治療を組み合わせることもあるが、いずれの治療も後遺症や副作用がでる可能性がある。

可視総合光線療法の併用で、この症状の軽減や回復を早めたり、体調を維持する効果が期待できる。



■ガンの三大療法

◆外科治療

ガン病巣やその臓器周辺組織を切除。

早期ガンであれば手術が積極的に提案される。

検査では分からない微小転移がなければ完治の可能性が高いが、創傷部の治癒と全身の体力回復に時間がかかること、切除によってその臓器機能が低下したり失われることがある。

◆抗ガン剤治療

ガン細胞を死滅させたりガン細胞の増殖を抑えたりする。

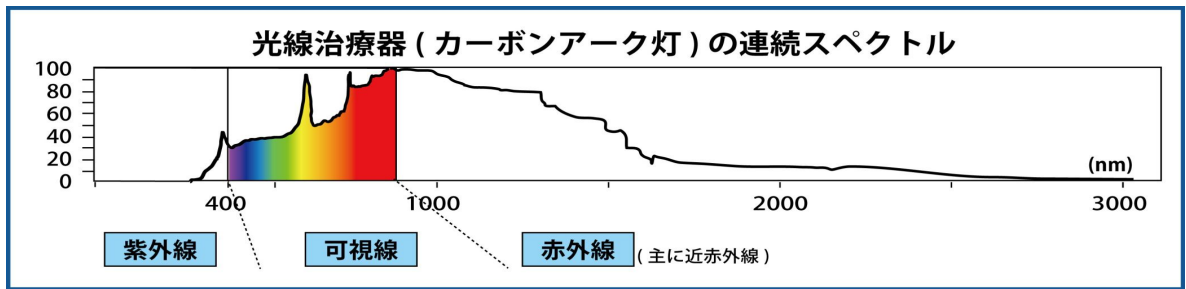
血液を通して全身を巡るため微小転移にも効果がある。

ガン細胞以外の正常細胞にも影響を与えるため吐き気、倦怠感、脱毛手足のしびれや造血器官への障害などの副作用が避けられない。

◆放射線治療

ガン病巣部に放射線を照射し、ガン細胞を死滅させる局所療法。

放射線照射部分の皮膚や粘膜の炎症、吐き気や倦怠感などの放射線障害があらわれることがある。



- ↓
 - 殺菌作用
 - 消痒作用
 - 免疫調節作用
 - ビタミンD産生
- ↓
 - 新陳代謝の活性化
線維芽細胞(肉芽)の分化作用による創傷治癒促進
 - 内分泌、自律神経系各生理機能調節
- ↓
 - 血液循環改善作用
 - 全身や患部への酸素栄養などの補給

血行状態を改善し手術後の創傷患部の炎症物質や老廃物の除去を促し、肉芽再生作用により術後の皮膚をきれいな状態に戻す効果や抗ガン剤、放射線によりダメージを受けた正常細胞や各臓器の働きを回復させる効果が期待できる。光線治療継続により体内で産生されるビタミンDが免疫力強化に寄与しガンの再発予防や進行抑制などの効果が期待できる。

■光線治療法

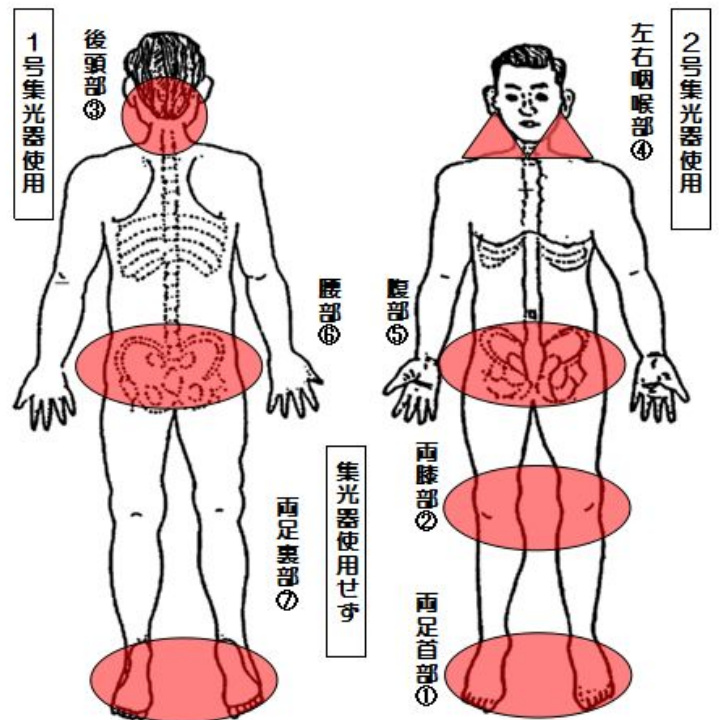
◆治療用カーボン

- 1000-4008番
- 1000-3001番
- 1000-5000番 など

◆照射時のポイント

- ガンの種類や進行具合などを考慮して他の直接照射を追加。
- 病院治療の影響などにより体調が優れないときは光線治療は無理をせずにできるところまで照射するもしくはその日の光線治療は休んでも構わない。

◆照射部位



◆照射時間： 各5～10分間

■治療例1（肺ガン術後） 78歳 男性 東京都 165cm 52kg

◆症状の経過：

8カ月前、頭が重くなりフラフラした。念の為病院で検査した結果「肺ガン」の診断を受けた。2カ月後に胸腔鏡下手術で左肺上葉部を切除した。ガンは初期だったので術後治療は行わず経過観察することになったが、術痕の痛みとツシが気になっていた。また入院中にふらついて転倒し、額をぶつけて出血した。

出血と痛みは治まったが、傷痕が気になるのでこちらの治療も合わせて以前から使っていた光線治療の照射方法確認のため当附属診療所を受診した。

◆治療用カーボン：1000-4008番

◆照射時間：⑦、左肺横の術痕、額の傷痕(各10分間)、他照射部位(各5分間)



◆治療の経過：自宅でも日光線治療を行った。術後に感じていた冷えが和らぎ、落ちていた体力が徐々に回復してくるのを実感した。肺ガン術痕は1カ月で痛みとツシはなくなり、好きな植木の手入れを長時間しても気にならなくなった。額の傷痕も徐々に薄くなり半年後の現在目立たなくなった。肺ガン術後の経過は順調で再発はなく、体重は術前と変わらず維持できている。光線治療は継続中である。

■治療例2（直腸ガン術後・抗ガン剤の副作用による色素沈着） 79歳 女性

東京都 147cm 46kg

◆症状の経過：

1年前の健康診断で、直腸ガンが見つかり後日手術を受けた。周囲リンパ節転移もあり、術後に半年間の抗ガン剤（ゼローダ）の治療を始めた。

光線治療は、以前から時々行っており今回も自己流で手術前から行っていた。

抗ガン剤治療開始から1カ月が経過して、目立った副作用はなく体調は良かったが、この状態を維持できればと思い照射方法を確認しに当附属診療所を受診した。

◆治療用カーボン：1000-4008番

◆照射時間：各10分間 追加照射：両手の平・甲、左右咽喉部④(各5分間)



◆治療の経過：抗ガン剤治療4回目終了後、手足の黒ずみが目立ってきた。病院では抗ガン剤の副作用による色素沈着と言われた。当所で再度相談し両手の平・甲と左右咽喉部④各5分間追加照射した。抗ガン剤が終了して1カ月後手足の黒ずみは徐々に薄くなってきた。2カ月後にはさらにキレイになりほぼ元の状態に戻った。術後1年後の定期検査では異常はなく、病院の先生から「経過は順調。副作用も他の人に比べて軽かった」と言われ嬉しかった。光線治療は再発予防のために継続中である。

■治療例3（乳ガン術後・放射線治療の後遺症による皮膚炎） 71歳 女性

◆症状の経過： 埼玉県 152cm 45kg
 1年半前に右乳房外側のしこりに気付いた。病院を受診し検査したところ「乳ガン」の診断、しかも右乳房だけでなく左乳房にもガンがあった。後日左右とも温存手術を受け、術後に放射線治療と3カ月間の抗ガン剤治療を受けることになった。術後治療の経過を良くするために、以前胃炎治療で効果的だった光線治療を思い出し、照射方法確認のため当附属診療所を受診した。

◆治療用カーボン：1000-4008番

◆照射時間：⑦②⑤⑥（各10分間）、③（5分間）

追加照射：両手の平と胸全体（各10分間）



◆治療の経過：光線治療を自宅で毎日行った。抗ガン剤治療の副作用で手足のしびれや吐き気がでてきた。また同時期に放射線治療を行ったところ、患部の皮膚が日焼け後のように赤くなり、ピリピリした痛痒さが気になった。当所で再度相談し両手の平と胸全体の追加照射をした。胸の皮膚炎は光線照射すると痛痒さが和らぎ2週間で完治した。3カ月後抗ガン剤治療が終了し、手足のしびれは以前と比べて軽くなり日常生活に支障はなくなった。食欲もあり、術後3キロ減った体重は術前と同じに戻った。画像検査上ガンは消失しているが、念のため分子標的薬ハーセプチンを1年間続けることになったので、体調維持と副作用軽減のため光線治療は継続している。